

地芝居の世話狂言

「八百屋献立」「寿門松」

安田 徳子

地芝居では、義太夫の語りを原則とする。「勧進帳」でさえ長唄ではなく義太夫で語られ、当然ながら丸本物が圧倒的に多い。中でも「キラ」と呼ばれるきらびやかな衣裳を身につけ、遠い歴史を描く時代物が主流をなすが、世話物にも人気演目が含まれる。この中で「八百屋献立」「寿門松」「新口村」は、近松門左衛門の原作に基づく作品である。「新口村」は現在の大芝居でも上演されている演目だが、他の二作は地芝居のみに残るものである。本稿ではこの二作を取り上げて検討し、地芝居世話狂言の在り方を見ておきたい。

(一) 地芝居の「八百屋献立」

まず、「八百屋献立」は、現在確認できた地芝居団体では、岐阜県下呂市の鳳凰座歌舞伎と中津川市三郷歌舞伎が「心中宵庚申八百屋の献立」、中津川市の東濃歌舞伎中津川保存会が「増補八百屋

献立 新靱八百屋の段」、愛知県豊田市の小原歌舞伎が「世話料理八百屋献立」、新城市の新城歌舞伎が「心中宵庚申 八百屋献立」、豊川市の金沢歌舞伎が「お千代半兵衛心中宵庚申 八百屋の献立」の外題で上演しており、松本団升(団女)・中村津多七・中村竹昇の各振付師が台本を所有している。中津川ふれあいセンター保管の伊藤家旧蔵台本中にもこの演目は含まれる。鳳凰座と三郷は松本団升、中津川は中村津多七、新城は中村竹昇、小原と金沢は万人講の流れを汲む。一方、現在までの調査では、東濃・三河・西遠地域以外ではこの演目の上演を聞かない。おそらく、この地域にのみ伝わる演目と思われる。

外題は少しずつ異なるが、いずれも粗筋はほとんど変わらない。出自は侍ながら、剣難の相があるというので、八百屋の養子となっている半兵衛にはお千代という愛妻がいるが、後家の姑お熊は半兵

衛に横恋慕しているので、半兵衛の留守にお千代を姑去りで里へ帰してしまふ。帰ってきた半兵衛は姑去りでは姑が恨まれるので、「もう一度家にお千代を戻してほしい、必ず自ら離縁するから」と言いつくろって、姑の許しを得、丁稚三太郎に迎えに行かせ、世話役の太兵衛に付き添われて、お千代が戻ってくる。姑は心配してやってきた半兵衛の兄脇坂重蔵にも、世話役の太兵衛にも、「今宵は庚申だから奥で庚申の料理を召し上がれ」と親切ごかしに奥へ追い払うと、半兵衛にお千代の離縁を迫る。追い詰められた半兵衛は、覚悟を決めてお千代に離縁状を書いて渡す。甥の嘉十が姑の過去を暴いて留めに入るが、姑は婿夫婦に追い出されるとわめく。この様を見て、太兵衛も重蔵も呆れて、帰って行くが、その時、重蔵は半兵衛に武士の心だと家重代の短刀を置いて行く。夜が静まった頃、半兵衛は自害しようとするが、そこへお千代が戻ってきて、死ぬなら共にと望むので、二人は密かに家を抜け出して死出の道を急ぐ。というもの。

夫婦心中という悲惨な事件を脚色したもののだが、姑お熊の下卑た醜悪な行動、加えて丁稚三太郎のこましゃくくれた痴な行動が、大いに笑いを誘って喜劇的演目となっている。松本団升系の鳳凰座歌舞伎台本は『お千代半兵衛 心中宵庚申 八百屋の段』の外題で、それに付された解説には、近松門左衛門作「心中宵庚申」によるが、

原作そのままではなく、「近松の作を土台にして中村鴈次郎から阪東寿三郎と引きつがれ」、「地方廻りの役者は、又それに後家おくまをお色気ババに仕上げ、お面白いお芝居に仕上げ、好評を博して居ます」と説明されている。

(二)「心中ニッ腹帯」と「心中宵庚申」

享保七年(一七三二)四月六日朝、大坂生玉馬場先の大仏勧進所で、油掛町の八百屋半兵衛がその妻お千代と心中した事件は、嫁の姑去りから離縁に追い込まれた夫婦の心中で、妻の腹には子がいたことが好奇を誘い、その月中に浄瑠璃や歌舞伎に脚色された。すでに、横山正氏が詳細に検証されたように、宝暦版『外題年鑑』によれば、近松門左衛門作の浄瑠璃「心中宵庚申」が竹本座で初演され、同日京都嵐三十郎座で歌舞伎「生霊紅毛氈」も上演された。しかし、紀海音作の浄瑠璃「心中ニッ腹帯」が豊竹座で上演されたのはこれ以前だったと考えられる。外題にある「宵庚申」は前夜の四月五日が庚申だったこと、「紅毛氈」は二人が毛氈の上で情死したこと、「ニッ腹帯」は千代の抱え帯を二つに裁って、一つで半兵衛の切腹の傷口を縛り、もう一つを千代の胎児の腹帯として心中したことによるという。『反古籠』などによると、海音の「心中ニッ腹帯」は大当たりだったが、近松の「心中宵庚申」はそれほどなかったという。

その後、同年夏に大坂竹島幸左衛門座で歌舞伎「新板宵庚申」が上演されている。同じ頃江戸市村座では歌舞伎「八百屋心中」が、七月一日には中村座で「花毛二腹帯」が上演され、六月には江戸辰松座で「心中二つ腹帯」が上演された。こうして、「八百屋心中」と通称されるお千代半兵衛の心中物は、江戸にも広がったが、横山氏の分析によると、これらの作品は、大方海音の「心中二ツ腹帯」の影響の強いものであったという。しかし、「明和以後は逆に近松の「心中宵庚申」の系統に立つものが著しく多くな」るが、さらにその後には「操り芝居の複雑化、義太夫節の技巧化が進行するにつれて」「近松原作を基礎におきながらも、さらに海音の趣向をも利用し、また登場人物も名も互に両者を交錯させて複雑な改作を産み出していった」という。現行の地芝居のような内容、「八百屋献立」という外題は何時からであろうか。

浄瑠璃及び歌舞伎によるお千代半兵衛物の上演記録を調査すると、外題や登場人物からも横山氏のご指摘は概ね確認できるが、「八百屋献立」の呼称が登場するのは、刊記に「天明七末年四月十五日本売出シ」とある中山清七板の四代目豊竹若太夫正本『新物八百家献立』（東京大学教養学部黒木文庫）だが、『義太夫年表』の指摘によると、『義太夫執心録』によれば、この若太夫は襲名前の和佐太夫時代の明和末年から安永初年頃に「八百屋の献立」を語っていた

としている。この両者が同じものとは言い切れないが、「新物八百家献立」はほとんど「心中二ツ腹帯」をそのまま利用し、「第三」の部分の少々書き換えたものである。この曲は大坂屋秀八板の六行稽古本（上田市立図書館花月文庫）などもあり、江戸・大坂で幕末まで広く行われていたようである。

（三）「世話料理八百屋献立」

一方、天明八年三月二七日より大坂角の芝居（中山久吉座）では「けいせい含箇条」及び大切所作事「花形見娘道成寺」とともに、歌舞伎「世話料理八百屋献立」が上演された。番付（石水博物館）によれば、中山来助の「半兵衛」、山下八百蔵の「お千代」、山村儀右衛門の「姑おくま」、市野川彦三郎の「八百屋伊右衛門」、中山文五郎の「いわせ小平太」、山下金作の「お千代姉お十」、三枘松五郎の「甥太兵衛」、中山他蔵の「下人と茂太」、中村金蔵の「半兵衛子おつゆ」、嵐福蔵の「ちよ妹」であった。この上演は四月一〇日より前狂言を「本朝廿四孝 二段目三段目」に替えて引き続き上演された。但し、この時の番付には関三十郎の「島田平右衛門」と「山脇半次郎」、中山栄蔵の「戸田ぼく才」、坂東かにぞうの「金藏」及び「下女」などが加えられ、三枘松五郎は「甥太兵衛」に加えて「沼津奎之丞」の役名が加えられ、さらに、山下金作の役名は「姉お十」

ではなく、「おぼおじう」となっている。

「世話料理八百屋献立」は「屋敷の段」(上)、「在所の段」(中)、「八百屋の段」(下)及び道行からなっており、上巻は浜松に里帰りした半兵衛が沼津奎之丞と武道の立会をする羽目となる件、中巻は半兵衛の留守に姑去りとなったお千代が上田村の実家島田平右衛門住家へ戻り、そこへ大坂への帰途立ち寄った半兵衛と出合い、半兵衛は平右衛門に千代と生涯添い遂げると約して連れ帰る件、下巻が大坂新靱の八百屋の場で、お千代を一時伯母のお十に預けて、家に帰った半兵衛は姑去りではなく、改めて自身で離縁をするので、お千代を家に戻してくれるように姑を説得してお千代を戻すが、ちよの姉が詫言をしても姑は聞き入れず、半兵衛にお千代の離縁を迫るので、半兵衛は去り状を書く。養父の伊右衛門は頼りにならず、甥の太兵衛は半兵衛を追い出して跡をせしめようとするので、庚申の夜も静まった頃、家を抜け出してお千代と落ち合い、心中に向かう、というものの。上巻は海音の「心中二つ腹帯」、中巻は近松の「心中宵庚申」、下巻は「心中二つ腹帯」を主にしながら、役名は「心中宵庚申」のものを主に利用しており、謂わば両作品を取捨選択して脚色したものであったようだ。ただ、どの絵尽しにも「八百屋の婆」が包丁を振り上げている絵が描かれていて、半兵衛の養母の悪女ぶりが強調された内容で、地芝居の「八百屋献立」に通じる

点もあるが、八百屋平右衛門も登場し、その他の登場人物の役割も地芝居とは異なっている。

しかし、右で述べた番付の記載からすると、三月二七日よりの上演は、八百屋の場のみで、四月一〇日より改めて上中下通しで上演したように思われる。「世話料理八百屋献立」は、現存資料ではこの上演が最も古く、これが初演かと考えられるので、当初は八百屋の場のみを脚色上演したところ評判を得たので、前の二場を加えて上演したということであろうか。「世話料理八百屋献立」は翌五月一三日より京四条北西芝居で再演された。中山来助の「半兵衛」、山下八百蔵の「お千代」、山村儀右衛門の「姑おくま」と「八百屋の段」の主要な配役は同じであり、この段を眼目として大いに評判を得たことが窺われる。その後も「八百屋の段」を中心に上方では昭和初年まで繰り返し上演されている。その際、半兵衛以外は、その妻の名も「おてう」(文政四年一月及び同二年二月の大坂北堀江市の側)、八百屋の婆が「おらく」(文政元年四月大坂角)、「八百屋仁右衛門」(文化三年十月京北野下の森、文化四年一月大坂北堀江市の側)、「姉お十」は「伯母」で名もさまざま、といった変化があり、内容にも多少の変更が加えられていたかもしれない。上方芝居圈だった名古屋芝居でもしばしば上演されているが、江戸では文化七年六月の森田座『歌舞伎年表』が唯一の記録で、ほとんど行われ

なかった。また、弘化元年（一八四四）三月の大坂若太夫座及び嘉永四年（一八五二）三月兵庫、翌四月京四条北で「世話料理八百屋献立」が人形浄瑠璃で上演されているが、番付『義太夫年表』の役名から推すと、次に述べる「増補八百屋献立」と同内容のように思われ、「世話料理八百屋献立」は歌舞伎のみで行われていたようである。猶、明治三六年以降は歌舞伎「世話料理八百屋献立」でも、「増補八百屋献立」と同内容のものになっていったらしい。

（四）「増補八百屋献立」

ところで、文政六年（一八一三）九月堺新地北の芝居で人形浄瑠璃「増補八百屋献立 八百屋ノ段」が上演されている。『義太夫年表』によれば、豊竹若太夫の一座によるものだが、登場人物を見ると、八百屋ばば（吉田虎造）、半兵衛（吉田小竹）、お千代（吉田三五）、嘉十良（吉田文三）、十蔵（吉田文五郎）、太郎兵衛（吉田文七）、でつち三太郎（桐竹門三）で、八百屋平右衛門が登場しない。また、その他の登場人物名も「世話料理八百屋献立」とは異なっている。翌文政七年一月大坂堀江市の側で上演された「江戸土産八百屋献立 新うっぱ八百やの段」も役名などから同じ内容だったと思われる。その後この曲は「八百屋の段」のみで、「八百屋献立 新鞆の段」として人形浄瑠璃及び素浄瑠璃でも繰り返し上演されて現在に至って

いる。右の堺新地の記録より古いものは現在見出し難いが、堺新地が初演というのは少々疑問が残るので、初演はそれ以前だったかもしれない。ともあれ、浄瑠璃本によれば、この曲の内容は地芝居の「八百屋献立」と全く同じである。従って、地芝居はこの「増補八百屋献立」を歌舞伎に移したものと言えよう。

「増補八百屋献立」の歌舞伎上演は、明治一四年（一八八一）七月一日より大阪朝日座で行われた「名古屋女俳優惣一座」によるものもともと古い。市川繁代の「八百屋半兵衛」、坂東式代の「おちよ」、浅尾花重の「八百屋婆」、市川八重治の「太郎兵衛」、坂東五代の「丁稚三太」、市川小松の「兄重蔵」、片岡菊鶴の「嘉十郎」であった。翌々明治一六年（一八八三）三月京都東向大黒座でも「名古屋婦女俳優」による「待宵庚申八百屋献立 八百やのどん」が上演されている。配役は同じではないが、内容は「増補八百屋献立」と酷似したものだったと思われる。名古屋の女芝居では「八百屋献立」は得意演目の一つだったようである。名古屋の芝居記録を見ると、寛政三年（一七九二）以降幕末までしばしば上演されていた八百屋中物は、外題に違いはあっても役名から見ていずれも、歌舞伎では「世話料理八百屋献立」、浄瑠璃では「増補八百屋献立」であった。

しかし、明治以降の上演は明治二六年（一八九三）四月二日より京杵座で、同じ年五月六日より弘法座で、いずれも篠塚力枝・中村米

吉・坂東式代ら「女俳優」の一座での記録が古い。配役や内容を示すものがないので、詳細は不明だが、右の大阪の記録から見ても「増補八百屋献立」の歌舞伎化だった可能性が高い。幕末から明治にかけて、名古屋では篠塚力代や大川春吉などの女優者の一座が活躍していた。「増補八百屋献立」はこうした女優者一座の演目として歌舞伎化されたのではなからうか。

明治三十六年（一九〇三）九月京都歌舞伎座で上演された「世話料理八百屋献立 八百屋の場」は、浅尾関十郎の「母お熊」、中村福之助の「八百屋半兵衛」、嵐若橋の「女房千代」、市川滝治郎の「兄十蔵」、実川正若の「甥嘉十郎」、中村富助の「講中太郎兵衛」、中村吉十郎の「丁稚三太郎」、中村仙松の「下女およし」となっていて、内容は「増補八百屋献立」だったようである。さらに、これ以降は「世話料理八百屋献立」の外題でも確認できる限りは皆「増補八百屋献立」と同内容で行われたようである。明治三十八年（一九〇五）一月大阪弁天座と京都歌舞伎座の「世話料理八百屋献立」、あるいは明治四一年一〇月大阪中劇場の「お千代半兵衛八百屋 新観八百屋の場」で、初代中村鴈治郎が「半兵衛」を演じているが、明治末期から大正期に「八百屋婆おくま」を得意として繰り返し演じた嵐佳笑など、中小芝居の役者によるものがほとんどであった。明治三〇年代後半になって、女芝居から上方や名古屋の中小芝居に取り上

げられて、その人気演目となったのである。

一方、大芝居では、大正元年四月大阪中劇場で「心中二ツ腹帯 上田村平右衛門住家の場 新観八百屋の場」が尾上多見之助の「八百屋半兵衛」、嵐徳三郎の「女房お千代」で上演された。また、大正九年（一九二〇）六月大阪中座、大正十一年一二月京都南座、大正一四年二月大阪中座では「心中宵庚申 上田村の段 油掛町八百屋の段」が初代中村鴈治郎の「半兵衛」、五代目中村福助の「お千代」で上演されている。昭和にはいっても初代鴈治郎は「心中宵庚申」を演じており、大歌舞伎では初代鴈治郎を中心に、近松の原作に立ち返ることが強く意識されていたようである。

（五）「寿門松 浄閑住居の場」

「寿門松 浄閑住居の場」も大歌舞伎では演じられない、地芝居のみに残る世話狂言である。原典は享保三年（一七一八）正月二日より大坂竹本座で初演された、近松門左衛門作の人形浄瑠璃「山崎与次兵衛寿の門松」の中巻で、通称「浄閑住居の場」である。これは前述の「八百屋献立」よりさらに限られた地域でしか上演されていない。現在調査したところでは、東濃の松本団升と中村津多七、新城の中村竹昇の指導団体のみで行われている。

山崎与次兵衛は、自分の恋人の遊女吾妻に言い寄る彦介を懲らし

めようとして手傷を負わせた与平の罪を、男の義理から引き受ける。親浄閑に預けられ、座敷牢に入れられて、もし彦介が死ねば与次兵衛は死罪という極限に追い込まれている。嫉妬にかられながらも夫の身を案じる妻のお菊。お菊の父浪人梶田治部右衛門は、示談の金を出そうとしない浄閑を、将棋にかこつけてなじるが、浄閑は、金を惜しんでいるのではなく、金を尊ぶ町人の道を教えて反省を促すのだと聞かない。しかし、浄閑はお菊に鼠の升落としにかこつけて廓を脱げてきた吾妻とともに与次兵衛を落としてやるように促す。という内容で、男同士の義理、武士と町人の意気地に、女心の哀れと親子の情が絡まって、悲劇の中に家族愛が強調された演目である。

「山崎与次兵衛寿の門松」は、初演の後、享保七年十二月大坂嵐座で「山崎与次兵衛半中節」、翌享保八年二月京都八重桐座の二の替りに「けいせい山崎通」の外題で歌舞伎に移されているが、これ以降江戸時代における本作の歌舞伎での上演は確認できない。浄瑠璃では安永五年二月をはじめ、幕末までに上方で数度、天明三年には江戸外記座でも上演されているが、決して上演が多いとは言えない。前述の「八百屋心中」と違って、素材は明らかではない。『落葉集』（元禄一三年／＼一七〇〇／＼刊）第四「古来当流踊歌百番」に収められた「山崎与次兵衛踊」によって巷間に知られた伝承を基に、紀海音の『梶久末松山』（宝永五年）の影響を受けて脚色された

作品という⁽⁵⁾。与次兵衛は摂州山本村の有徳人坂上与次右衛門（濤標）宝暦七年（一七五七／＼刊）とも、淀屋辰五郎（西沢一鳳『伝記作書』）ともいわれているが、注目の事件の脚色でもなく、近松が多く手がけてきた心中物でもなく、すでに指摘されているように、作品の構成に多くの矛盾、破綻もあったので、この作品の関心は続かなかったであろう。加えて、この作品は寛延二年七月竹本座初演の浄瑠璃『双蝶々曲輪日記』（竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作）に取り込まれ、こちらが好評を得て、繰返しの再演や書換狂言を生んだことも、「寿門松」への関心を失わせてしまったと思われる。

ところが、明治三十九年二月大阪角座において「寿門松 三幕 山崎浄閑住家の場」が上演された。これには「近松門左衛門の原作、渡辺霞亭氏の脚色」とあり、近松の「寿門松」の中巻部分を渡辺霞亭が歌舞伎に脚色したものであった。片岡我当の「南与平」、嵐橋三郎の「梶村次郎衛門」、中村福助の「山崎浄閑」、実川延二郎の「山崎与治兵衛」、嵐巖笑の「お菊」、中村成太郎の「藤屋吾妻」であった。明治三五年頃から演劇改良運動の中で、原作尊重意識が高まり、近松作品の再評価の風潮が高まっていた。これもそうした状況の中から生まれたものだったのだろう。「寿門松」の中で人物設定や筋立も趣向もよくできた一場として評価の高い中巻の「山崎浄閑住家の場」を取り上げたのである。明治四二年二月一日より京都

歌舞伎座では、浅尾閨十郎の「南与平」、中村福之助の「与次平衛」、中村珊瑚郎の「浄閑」で、上・中・下が通して上演された。

同月一五日より大阪松島八千代座で厳笑の「お菊」、徳三郎の「与五郎」、芝雀の「吾妻」、長太夫の「浄閑」、右田作の「梶村次郎右衛門」で「寿門松 浄閑内の場合」が再演されている。これ以降、大正・昭和初期にかけて嵐徳三郎や市川右田作らによって繰り返し上演されて、主に上方を中心に歌舞伎作品として定着したようである。

(六) 地芝居へ

地芝居の「八百屋献立」も「寿門松 浄閑内の場合」も、明治になってから歌舞伎化された浄瑠璃作品で、主に上方を中心に行われてきて、地芝居に残ったもののである。この二作品に共通するのは、いずれも江戸時代の庶民の共感を呼ぶ家族劇である。「八百屋献立」では兄も甥も大家も丁稚までも半兵衛夫婦を思いつけているが、悪意に満ちた継母のために心中に追い込まれる。悲劇的結末なのだが、婆を痴な笑い者として描くことで愉快な一幕に仕立てられている。「寿門松」の方は遊女吾妻への嫉妬を押さえ健気に夫を氣遣う妻お菊、子を思う夫婦の親、肉親愛が将棋や鼠の升落としにかこつけ浮かび上がる。この芝居は、分かり易く芝居巧者でなくとも十分享受

できる。「寿門松」は近松の原作に近い脚色だが、「八百屋献立」は近松の原作からは大きく変形している。原作尊重の意識ではなく、わかりやすさが第一で、いずれの形でもよかったのである。それでも「宵庚申」の外題を持つ場合もあるのは、著名な外題の方が観客に受け入れられ易いからであろう。また、商家の一間で展開する芝居は、複雑な仕掛けもいらないので、粗末な飯小屋でも十分演じられる。旅芝居には格好の演目で、その旅役者から地芝居へ伝えられたのである。

明治三四年正月一四日より大阪堀江座で中村信濃・中村藤蔵一座により、明治三八年二月一五日より大阪稲荷文楽座において信濃・梅次・南枝・円当・珊瑚・卯多五郎らにより「お千代半兵衛」が上演されている。また、大正七年六月一五日より大阪松島八千代座では多見丸・信濃・右田作・松鶴らによって「寿門松」が上演されている。ここに見える中村信濃は一座を率いて、明治三〇年代から大正期にかけて大阪堀江座あるいは稲荷文楽座を中心に活動した、所謂小芝居の役者で、右の二演目の他、「敷革の曾我」「最後の政岡」「源平咲分牡丹」など、現在では地芝居のみに残る演目を上演していた。この信濃のような役者から旅役者に伝えられ、さらに地役者へ伝わって、地芝居に残ったのであろう。

注

(1) 大阪市天王寺区生玉町の銀山寺にあるお千代・半兵衛の比翼塚の墓碑と過去帳による。但し、京都府相楽郡精華町植田の浄土宗来迎寺内にも二人の供養墓があり、銀山寺とは事件の伝承も異なっている。

(2) 横山正『近世演劇論叢』(昭和五一年七月 清文堂)第一部第二章。

(3) 注(2)参照。

(4) 「世話料理八百屋献立」の初演台本は現存せず、再演以降のものだが、阪急学園池田文庫に「屋敷の段」と「道行」部分が伝存する。また、初演のものではないが、それに続く、五月一日より京四条北西芝居で上演された時の絵尽しが伝わる(石水博物館)。また、文政元年(一八一八)四月八日よりの大坂角の芝居、文政二年一〇月九日よりの大坂北堀江市の側芝居の絵尽し(何れも石水博物館)もある。これらを参考に筋立を類推した。

(5) 黒木勘蔵『『寿の門松』の成立とその人物』(『近松門左衛門』)大東出版社 昭和一七〇所収

(6) 勝倉壽一「『山崎与次兵衛寿の門松』の問題」(『福島大学教育学部論集(人文科学)』六四 一九九八・六)など。

(7) 例えば、明治三五年(一九〇二)三月伊井蓉峰・河合武雄・大谷馬十らが真砂座で近松研究旧劇を標榜し、「心中天網島」「堀川波鼓」「大経師昔暦」などを上演した。